

## ディケンズの見たアメリカ

志田 均

1

一八四二年の一月から六月までの半年近い期間、ディケンズはアメリカを旅してまわっている。当時のアメリカはイギリスから政治的に独立していたものの、イギリス系アメリカ人にしてみれば、イギリスは遠く離れたもう一つの母国のような存在だったろう。政治的な独立は勝ち得ていたとしても、精神的にはおそらくまだまだイギリスの影響力が強く働いていたにちがいない。そうした事情について、チェスタンはこう書いている。「ディケンズが初めて合衆国を訪問した時期においてさえ、我々イギリス人は、依然としてアメリカを植民地と感じていた。時には傲慢で、攻撃的で、そして理解し難い植民地であったとしても、それでも植民地であることに変わりはなく、我々の文明の一部であり、我々の五体の一部だったのだ。そしてアメリカ自身、私がすでに述べたように、どんなに強がって我が道を行こうとも、実際には我々を母なる国と見なしていたのだ。」<sup>1</sup>

こうしたことは、とくに文学の面で歴然としていた。ディケンズよりも十年ほど前にアメリカに渡っていたフランス人のトクヴィルは、その状況を次のように記している。「アメリカはおそらく今日では、文学に最も無関心な文明国であろう。けれども、そこには精神の事象に関心をもっている、非常に多数の人々がいる。そして彼等は、精神の事象に全生涯を<sup>きき</sup>献<sup>さ</sup>げて研究はしないが、少なくとも、自分たちの閑暇を費やすだけの魅力をこれに感じている。けれども、これらの人々が要求している大部分の書物を、これらの人々に供給しているのはイギリスである。イギリスの殆どすべての優秀な著書は、アメリカ連邦で再版されている。大ブリテンの文学的天才は、なおその文華的光線を、新世界の森の奥底にまで放射している。」<sup>2</sup>

トクヴィルの目にしたこうした状況は、十年後にディケンズが訪れたときには多少変化していたかもしれないが、ディケンズがアメリカでも熱狂的に読まれていたことは事実であり、ディケンズを迎えた当時のアメリカ人たちの歓迎ぶりは、まさにそれを端的に示している。今日からすれば、その熱狂的な歓迎ぶりは海外からやってきた一小説家に対するものとはとても信じ難いものであり、当時の小説家の世間的な人気の大きさに驚かされてしまう。ディケンズはたぶん例外的な存在だったのだろうが、それにしてもその異常なまでの騒ぎには、今日の芸能界やスポーツ界のスターに対するそれを思い出させるものがある。

私はしたいことは何もできず、行きたい所にはどこにも行けず、そして見たいものは何も見られません。通りに出れば、大勢の人に付いて来られます。宿にいれば、そこは訪問者たちで、縁日ようになります。一人だけ友人を伴って公共施設を訪れると、そこ

の責任者が堪えきれずに下りてきて、構内で私を待ち受け、そして長々と私に説明します。晩にパーティーに行くと、どこに立っていようと人々にまわりを取り巻かれてしまい、その過密のひどさに空気が不足してぐったりするほどです。外で食事をすると、私はすべてのことについてすべての人に話さなければなりません。静けさを求めて教会に行くと、私の座る席の近くに人々がどっと押し寄せ、牧師は私に向かって説教します。列車の席につくと、車掌ですら私を放っておこうとはしません。駅で降りて水を一杯飲もうものなら、水を飲もうと口を開けたとき、百人もの人々に喉元を注視されることなく飲むことはできません。こうしたことすべてがどんなことだか、考えてもみてくれ給え！ それから、郵便が配達されるたびに手紙が次々と届き、そのどれもが詰まらないことについてであり、しかも至急返事を寄こすように要求しているのです。自分の所に泊まらないからと言って腹を立てている者もいれば、一晩に四回以上私が外出しないからと言ってまったく愛想を尽かしている者もいます。私には休息も平穩もなく、気苦労に絶えません。<sup>3</sup>

最初に滞在したボストンでは、アメリカ人たちの歓迎ぶりに対して、ディケンズはとくに悪い印象は受けていないのだが、次の滞在地ニューヨークでは、その過剰ともいえる歓迎ぶりに対して嫌悪感さえ抱き始める。右に引用したフォースター宛ての手紙はほかならぬニューヨークから出されたもので、その書きぶりからはっきりとそれが読みとれる。そして、そこに見られる嫌悪感は、ディケンズがその後アメリカ人に対して抱く支配的な感情になるのだ。しかし、イギリスに帰国してからすぐに書き始められた『アメリカ覚え書』では、そうした感情はかなり抑えられたものになっている。とくに、そうした嫌悪感を抱く大きな原因となったはずの歓迎会については、なにも書かれていない。その理由をディケンズは『アメリカ覚え書』の最後でこう説明している。「私は歓迎会には言及しなかった。また、その歓迎会の影響で書くものに変化を来すようなこともしなかった。というのも、どちらの場合においても、私のこれまでの本を読んでもくれた海の向こうのあの一部の読者 鉄砲を握ってふさがれた手ではなく、握手しようと寛大に開かれた手を差し出して私を出迎えてくれた人々 に対して、残念なことしか打ち明けられないからである。」<sup>4</sup>

ディケンズにしては珍しいこうした抑制的な姿勢は『アメリカ覚え書』全般にも見られ、その結果、この作品はディケンズのものとしてはどこか活気の乏しいものになっている。現実の体験について綴ったものだけに、小説のように想像力を自由に働かせることができなかつたせいかもしれないが、しかし、そのためばかりとは限らない。実際、ディケンズのもう一つの海外での見聞録『イタリア便り』は、もっと自由な筆致で書かれているのだ。この辺の事情についても、チェスタトンがうまい説明を加えている。「一種の家族の責任としてのこの調子は、こうした『アメリカ覚え書』の風刺や提言にとくに一貫して感じることができる。ディケンズはアメリカについて心配しているが故に、アメリカに対して機

嫌が悪いのだ　まるでその父親であるかのように。彼はアメリカの産業や法や教育の編成を、結婚した息子の家事を見る母親のように調査し、ある辛辣さをもって提言をなし、悲観的であることに奇妙な喜びを見出している。彼はアメリカ人たちに、いくつかのある事柄はイギリスにおいてどのようにより良くなされているかを忠告している。」そのためディケンズは、「視察することが義務となっているある用件を抱えた、政府の視察官の精神でアメリカを訪れたのだ」ということになるわけである。<sup>5</sup>

## 2

ディケンズがアメリカないしアメリカ人に対して嫌悪感を覚えるようになった原因の一つには、確かに、こうした「視察」というどこかアラ捜しの視線でアメリカを見てまわったということが考えられるだろう。しかしそれは、ディケンズがアメリカに理想的な社会を見ようとしたことの裏返しの結果であることにも留意しなければならない。アメリカは理想的な社会の一つの実現に向かっているとヨーロッパ人の多くが前世紀から考えていたが、その意味でディケンズは、そうしたヨーロッパ人たちの一九世紀の末裔の一人といえる。「自由の科学は実践的な科学として意図されたものであり、したがって一七七〇年代と一七八〇年代初期に北アメリカのイギリス領植民地で起こった一連の事件は、フィロゾフたちの間に、この意図が実現されるかもしれないという希望をかき立てた。(中略)新大陸移住者の華々しい行動、その輝かしい勝利、そして意気揚々たる共和国建設は　少なくともフィロゾフたちに対して　人間はいささかなりとも自己改革と自己統治の能力をもっており、進歩は幻想ではなくて現実かもしれず、また理性と人間愛は、単なる批判の原理にとどまらないで人間行動を支配する原理になるかもしれない、という説得的な証拠を提出していた。」<sup>6</sup> こうした、アメリカに自分たちの理想郷を見出そうとするユートピア的志向を、ディケンズも人一倍もっていたのだ。ディケンズはそれまでも、イギリスという「旧世界」の抱える問題点を小説のなかで描いている(代表的なところを挙げれば、『オリヴァー・トゥイスト』では救貧院を、そして『ニコラス・ニクルビー』では学校をそれぞれ批判的に描いている)。そんなディケンズが、アメリカという「新世界」に「旧世界」では果たせずにいる夢を託したとしても不思議ではない。<sup>7</sup>

しかし、ディケンズのアメリカに対する一方的な失望だけだったら、それは単にディケンズの諦観に終わっていただけかもしれない。ところが、アメリカの方もディケンズに対して自分たちの理想を託しているところがあったのだ。ディケンズがアメリカでも人気のあった理由の一つには、右でもふれた、イギリスという「旧世界」の抱える問題点をディケンズが容赦なく批判するという点があったにちがいない。イギリスという「旧世界」に対する批判は、「旧世界」の旧弊から脱した(と考えられていた)アメリカという「新世界」の存在を間接的に支援するものとアメリカ人には受け取られていたのではないだろうか。いや、そうした意識はなかったとしても、ディケンズの社会批判的な小説のメンタリ

ティーが、多くのアメリカ人たちにとって共感をもって受け入れられたことを想像することは難しいことではない。そして、トクヴィルも言うように、文学の面ではまだまだイギリスの強い影響下にあったアメリカにしてみれば、ディケンズが「民主主義の一種の若い救世主」と考えられたとしても、これまた不思議ではないだろう。けれども、「お互いの幻滅は避け難いものだった」のである。<sup>8</sup>

ディケンズとアメリカとの相思相愛ともいえる関係に亀裂を走らせることになった原因の一つに、ディケンズが歓迎会の席で何度かふれた国際著作権の問題がある。当時のアメリカは、著作権を無視してイギリスの書物をいわば海賊版で販売していた。トクヴィルのいう「イギリスの殆どすべての優秀な著書は、アメリカ連邦で再版されている」ということの背後には、実はそうした実態が隠れていたのだ。アメリカで多く読まれていたディケンズは、当然それに比例する形で著作権を侵害されていたわけだが、この問題を歓迎会の席で言及したために、アメリカとくにアメリカの出版界から激しい非難を受けることになる。「匿名の手紙、直接言われる忠告、私に比べればコルト（当地で大いに注目を集めている殺人者）は天使だという新聞の攻撃、私は紳士ではなく欲得ずくの悪党であるとし、私が合衆国を訪れた目的に関してまったく途方もない虚報を添えている主張　こうしたものが毎日大量に殺到してきました。」<sup>9</sup>

このようなこともあって、ディケンズは渡米ほどなくしてアメリカに幻滅を抱き始める。『アメリカ覚え書』においては、こうした幻滅をディケンズはかなり抑えて書いているのだが、帰国してからの最初の小説『マーティン・チャズルウィット』では、主人公のマーティンを途中からアメリカに渡らせ、自分自身が経験して『覚え書』には書けなかったアメリカに対する幻滅を、小説という場の自由さに乗じて遠慮会釈なく書いている。その結果、ディケンズとアメリカとの関係は決定的に決裂してしまうことになるのだが、アメリカ人の感情をなるべく害さないように書いた『覚え書』でさえ、当時のアメリカ人にしてみれば許し難いものだったようである。当時のアメリカ人は自分の国や国民を少しでも悪く言われることを極度に嫌っていたらしい。「アメリカ人は、外国人との関係では、少しでもけなされることには我慢できないようであるし、そしていくらほめられても気がすまないようにみえる。彼等は少しでもほめられることを好んでいるが、また、どんなにほめられても、それで満足することもめったにない。彼等は外国人たちからほめられようとして、いつでも外国人たちをなやませている。そして外国人たちが、彼等のこのほめられたいという嘆願たんがんに反抗すると、彼等は自分を自分でほめて得意になっている。彼等は自らの功績こうせきに疑いをもちながらも、いつでも自分たちの眼でその功績の光景をまざまざと見ているといえよう。彼等の虚栄心きよえいしんは貪欲どんよくであるばかりではなく、不安と嫉妬しつどで満たされている。その虚栄心は、絶えずものほしそうではあるが、何ものをも与えない。その虚栄心はとりこもうとしていると同時に、騒々しく喧嘩腰けんかごしである。」<sup>10</sup>

悲劇俳優ウィリアム・マクリーディに宛てた手紙のなかで、ディケンズはハリエット・マーティノー（アメリカについての著書がある）に関してあるアメリカ人と交わした会話

を伝えている。「『しかし彼女が何をしたというのです。彼女がアメリカを十分誉めていることは間違いありません！』 『ええ、ですが彼女は私たちに私たちの欠点のいくつかを語りました。アメリカ人は自分たちの欠点のことを言われるのが耐えられないのです。そんなことで仲たがいしないことです、ディケンズさん、アメリカについては書かないように 私たちはまったくもって疑い深いのです。』」<sup>11</sup> ディケンズはこうした忠告を聞かずに『アメリカ覚え書』を書いたわけだが、ディケンズもマーティノーと同様に「アメリカを十分誉めている」のだ。ところが、当時のアメリカ人にしてみれば、いくら誉められようとも少しでも欠点の指摘があれば許し難いのであり、その点ディケンズの『覚え書』もまたマーティノーの場合と同じくアメリカ人には受け入れ難いものとなったのである。

確かにディケンズは、アメリカ人のテーブル・マナーの悪さや会話の退屈さやところかまわず唾を吐く野卑な振る舞いなどについて苦々しくふれているが、今日からすればディケンズの反応こそまっとうであり、こうしたことを指摘されて怒る当時のアメリカ人の方がどうかしていると思わざるをえない。実際、「今日のアメリカ人のほとんどは、『アメリカ覚え書』のなかに、憤怒を掻き立てられるものをほとんど見出さないだろう」と自身アメリカ人のエドガー・ジョンソンも述べている。<sup>12</sup>

### 3

『アメリカ覚え書』においてディケンズは、アメリカおよびアメリカ人に対する自分なりの推論ないしは結論めいたことを書きたくなる誘惑と戦い、ただ自分が出かけた場所に読者を忠実に連れて行くことだけを心がけたと断っている。<sup>13</sup> 『覚え書』にはディケンズのアメリカに対する幻滅感が随所に立ち込めているのだが、ディケンズがそのことに深く踏み込まなかった理由にはこうした執筆姿勢が勿論あったのだろう。しかしそれ以前に、アメリカを見るディケンズの視線にはただただ外部志向的な力が強く働きすぎているきらいがある。アメリカを見に行っただけだからそれも致し方ないかもしれないが、それにしてもその見方はあまりにも一面的すぎていて、自らの幻滅の根拠を探るにはもともと有効な視線ではなかっただろう。外部に視線を向けているだけでは自らの幻滅の根拠を探るには不十分であり、幻滅とはそもそもそれまで抱いていた自らの幻想がその効力を失うことだという内省がなければならぬ。そうした内省的な視線を伴わない限り、外部にいくら視線を向けても自らの幻滅の根拠を探り当てることはできないだろう。

しかし、それはなにもディケンズに限ったことではない。ヴィクトリア時代の小説家の社会に向ける視線は、概ねディケンズと同様に外部志向的であり、内省的な視線に欠けるところがあった。ましてや自分の内面を育んだ母国を離れ、自分の生活空間とは切り離された外国の社会を見る場合、その社会を見る視線はいっそう外面的な事実を引き寄せられてしまうにちがいない。当時のアメリカはイギリスにとってまったくの外国ではなかったとしても、そうした事実が変わりはないだろう。「ヴィクトリア時代の小説家たちは、彼

らの現代の後継者たちのように、孤独で反社会的な自我を腹心の友とする者たちではなく、社会を綿密に分析する者たちであり、したがって彼らのアメリカ訪問の任務は、社会の組織を調査し説明することである。(中略)ヴィクトリア時代の人々は、自分たちのあいだでその(アメリカ社会の 引用者註)領域を尊大にも分割し フランシス・トロロプはアメリカ人のマナーすなわちその社会の家庭内のことを扱い、アンソニー・トロロプとディケンズはその制度すなわちその社会の政治的な外形を査定する そして、それに対する彼らの批判は、社会的機能の適正な分割と分配についての役所のように形式主義的な文句なのである。」<sup>14</sup>

ピーター・コンラッドはこれに続いて重要な指摘をしている。「アメリカ人の生活は、私的なものと公的なものあるいは自然と社会のあいだに求められる構成的な区分を設けることをせず、こうした境界線を厳格なまでに尊重することにその技芸がかかっている小説家を当惑させる。ヴィクトリア朝の人々はそのことが理解できないあまりに、怒りと失望にまみれて行き詰まりに誘い込まれるのである。」<sup>15</sup>興味深いことに、ディケンズがアメリカおよびアメリカ人に対して抱く嫌悪感は、こうした「私的なものと公的なものあるいは自然と社会のあいだに求められる構成的な区分」が侵される場面においてであることが多い。見やすい例でいえば、アメリカ人がところかまわず唾を吐く行為に、それは端的に見てとることができる。人間が抱く嫌悪感というものは、そもそも人間社会の秩序を支える境界線ないしは「構成的な区分」が侵犯されるときに引き起こされる場合が多いものだが、アメリカ人の唾を吐く行為に対するディケンズの嫌悪も、そういう意味では「私的なものと公的なものあるいは自然と社会のあいだに求められる構成的な区分」が侵されることに対する嫌悪であるといえるだろう。アメリカ人がところかまわず(それこそ他の人と部屋で食事をしているときでさえ)唾を吐く行為は、まさにディケンズの秩序の感覚を踏みにじり、秩序の感覚の裏返しの表出といえる嫌悪感をいたく刺激したにちがいない。『アメリカ覚え書』のあちこちにその言及が見られるが、例えば国を代表する機関である議院においてさえ、そのあり様は変わらないのだ。

両院には絨毯が見事に敷かれてある。しかし、尊敬すべき議員一人々に用意されている痰壺があまねく無視されるためにこれらの絨毯が置かれている状態、そして絨毯の模様の上に四方八方で唾が浴びせられ撥ねかされるためにその模様に加えられているのはなはだしい改良、こういった様子はとても描写できない。私は訪問者皆に床を見ないように強く勧めるとだけ述べておこう。そして、もしたまたま何かを落としてしまったならば、たとえそれが財布であっても、素手では決して拾い上げないことだ。<sup>16</sup>

こうしたアメリカ人のマナーの悪さを積極的に捉える見方もある。ところかまわず唾を吐くことは度が過ぎているかもしれないが、ほかにもディケンズがマナーの悪さとして否定的にふれていることに、アメリカ人が帽子を被ったまま部屋に入ってくることがある。

マックス・ウェーバーなどは、これを「反権威的原理」の反映として積極的に捉えている。<sup>17</sup> トクヴィルもまた、アメリカ人の無作法を身分の差別がなくなったことの表れとして、その積極性を強調している。「身分の差別が消滅し、そして教育と出自との相異している種々の人々が、同一の場所においていりまじりあい混合しあうようになるにしたがって、礼儀作法の規則に通曉することは、殆ど不可能になる。そのとき、そこでは法則は不確実になっているので、これに服従しないからといって、これをよく知っている人々の眼から見ても、罪にはならない。それ故にそこでは、人々は形式によりもむしろ行為の根本義に執着する。」<sup>18</sup>

ディケンズもアメリカに旅立つ前の初心を忘れなければ、アメリカ人のマナーの悪さを違った角度から見ることもできたかもしれない。ディケンズはある手紙のなかでこう述べていたのだ。「私の考えはこうです。新世界に行くとき、人は当分のあいだ旧世界のことを視野から外して完全に忘れなければならず、そして旧世界の習慣や慣習を持ち出して比較してはなりません。あるいは、もし比較するのならば、（見ようと思えば）ロンドンの普通の通りや公共の場所でどれほどの野蛮さが見られるかを思い出すことです。」<sup>19</sup>ところがアメリカにやってみると、ディケンズはイギリスにいるときよりも却ってイギリス紳士然となってしまう。ディケンズは「アメリカにおいて、自分が基本的にはいかにイギリス人であるかを見出した」といえるだろう。<sup>20</sup>しかしこれに対して、「ディケンズは天性のアメリカ人だった」とマイケル・スレイターはまったく逆のことを述べている。「したがって彼は、自分の生まれた国に対してとまったく同じ愛憎関係を持ったのである。彼の過敏な自尊心や過酷なエネルギーや勤勉が報われることへの揺るぎない信念や過去の拒絶やそしてまた未来への信頼において、ディケンズはまったくもってアメリカ人だったのである。さらに、もし彼が一八四二年にその理想主義においてあんなにもアメリカ人的でなかったとするならば、その国を旅してまわっているときに目に付いた不完全さによって、あんなにもひどく当惑させられたり失望させられたりするとはなかっただろう。」<sup>21</sup>おそらくディケンズは、その観念的な理想においてはアメリカ人であり、その現実的な感性においてはイギリス人だったといえるだろう。

#### 4

人は観念的な理想において個々人の相違を乗り越えて協同することができるが、しかし個々人の相違の内実を支える感性を無視してまでそうすることは難しい。人は多かれ少なかれ、観念的な理想と現実的な感性とのあいだで引き裂かれているものだ。ディケンズのアメリカ体験も、そのことの一つの例証といえる。ディケンズがもっと観念的な人間だったなら、自分の感性的な反発を無視してまで、アメリカのなかに自分の理想の実現を見出していたかもしれない。しかし、ディケンズはむしろ感性の人であり、ディケンズが洞察力を発揮するのは物事をまず感性的に捉えた場合が多い。といっても、感性と知性とがま

まったく無関係なわけでないことは言うまでもない。ディケンズもアメリカに対してただただ感性的に反発したわけではなく、そこにはディケンズなりの「思想闘争」があったといえる。フォスターに宛てた手紙のなかでディケンズは、意見の自由がアメリカではいかに欠如しているかを次のように訴えている。

意見の大きな相違があるいかなる問題に関しても、ここよりも意見の自由が少ない国は地上には存在しないと思います。……さて！ 私はこうした言葉を不承不承、失望と悲しみを覚えつつ書いています。しかし私は、心底そう思っているのです。ご存知のように、私はボストンで国際著作権について話しました。そして、ハートフォードでもそれについて話しました。私の友人たちは、そのような傍若無人の大胆さに驚いて、茫然自失してしまいました。アメリカにたった一人であるこの私が、アメリカ人に対して、あなた方は一つの点であなた方の同国人に対しても私たちに対しても公正ではないとあえて切り出すことがあるということに、最も豪胆な人々でさえ実際に驚いて啞然としてしまったのです！ ワシントン・アーヴィング、プレスコット、ホフマン、ブライアント、ハレック、デйна、ワシントン・オールストン この国で著述している誰もがこの問題に深い関心を寄せていますが、それなのに彼らのうちの誰一人として、思い切って声を上げてその法律の実にひどい状態について不平を述べようとはしないのです。それによって私が誰よりも大きな損失を被っていることなど、どうでもいいことなのです。私に言う権利と聞いてもらう権利があることなど、どうでもいいことなのです。アメリカ人にとって不思議でならないのは、彼らに向かって、彼らが間違ったことをおこなってきた可能性があると言い出すほど無鉄砲な人間が、この世に存在し得ることなのです。<sup>22</sup>

こうしたことは、なにも文学者に限ったことではなかったようだ。トクヴィルも「一般に、アメリカにおけるほどに精神の独立と真の言論の自由との少ない国はほかにはない」と述べている。<sup>23</sup> 今日からすれば意外なことだが、当時のアメリカ人は大勢から孤立してまで精神および思想の独立性を前面に押し出すことは滅多になかったようだ。チェスタンはアメリカ人を「偉大な田舎者」<sup>24</sup>と呼んでいるが、当時のアメリカ人にはいわゆる村八分を恐れるといった、悪い意味での田舎者のメンタリティーが強かったのかもしれない。次の文章など、今日のアメリカ人、少なくとも進歩的なアメリカ人のイメージとは随分かけ離れたものといえるだろう。「一見したところでは、アメリカでは、人々の精神はすべて同じモデルに基づいてつくられており、また、そうであればこそ、それらの精神は正確に同じ道を辿っているといえよう。実をいえば、厳格な公式的模型からそれているアメリカ人たちにも外国人は時にはでくわすこともあるのである。そのようなアメリカ人たちのうちには、法律の害悪や民主政治の変りやすいことや、それに知識経験の欠如していることなどを歎いている人々もいる。彼等はしばしば国民性を悪化させる諸欠点をすら注意し



て、これらの欠点を<sup>きょうせい</sup>矯正するためにとられうる手段をも指摘する。けれども、諸君は別として、アメリカでは誰も彼等のいっていることをきかないのである。そして彼等からその心の奥底に抱いているこのような想いをうちあけられる諸君は外国人にすぎないのであり、そして諸君はいずれはここを去ってゆく。彼等は諸君にとって無用な真実のことどもを諸君にこころよく明らかに話すのである。そして彼等は公共の広場にでてゆくと本当のことはいえないのである。」<sup>25</sup>

トクヴィルはアメリカの民主主義に潜む危険性、とくに「多数者の圧政」の危険性を繰り返し指摘しているが、ディケンズもそれを、トクヴィルのように分析的ではないにしろ、直感的に捉えていたといえる。いや、国際著作権の問題に限っていえば、そこには収入の問題も絡んでいるので、いかにも一九世紀イギリスの中産階級出身の人間にふさわしく、実利的に捉えていたともいえる。といってもディケンズは、自分の収入のことだけを考えてわざわざアメリカ人に嫌われることをしたわけでは勿論なく、自分の収入の問題でありながら他の作家の問題でもあるからこそ声を上げたのである。ここにディケンズの経験主義がある。そして、国際著作権の問題で浮かび上がってきたアメリカの意見の自由のなさに対するディケンズの憤りのことを考えていくと、その憤りがアメリカ人のマナーの悪さに対する感性的な反発と無関係ではないような気がしてくる。チェスタトンも言うように、ディケンズは「アメリカにおけるマナーの<sup>フ リー ダ ム</sup> ぞんざいさ」を嘆いた」が、「しかし彼は、意見の自由<sup>フ リー ダ ム</sup>の欠如をもっと嘆いた」のであり<sup>26</sup>、その「マナーの<sup>フ リー ダ ム</sup> ぞんざいさ」と「意見の自由<sup>フ リー ダ ム</sup>の欠如」との相反する局面において、ディケンズのアメリカに対する感性的な反発はその知性的な反発とどこかで呼応しているような気がするのだ。実際、アメリカ人の「マナーの<sup>フ リー ダ ム</sup> ぞんざいさ」と「意見の自由<sup>フ リー ダ ム</sup>の欠如」とのあいだには、なにか通底するものがあるのではないだろうか。あるいは逆に考えれば、ディケンズのアメリカに対する感性・知性両面における反発には、なにか共通する要素が潜んでいるのではないだろうか。

それは、一言でいえば、他者への配慮のなさといえるだろう。そして、他者への配慮は他者を他者と認めることから始まる。さらには、他者を他者と認めることは他者の異質性ないしは他者との差異を認めることでもある。アメリカ人のマナーの悪さはまさに他者への配慮のなさの表れであり、国際著作権の無視もまた、他者の物を自分の物のごとく扱うという意味で、まさに他者と自分との差異を無視した行為といえる。当時のアメリカは、平等という理念のもとで「多数者の圧政」が幅を利かせていたために、おそらく個人のもつ異質性ないしは個人間の差異が軽んじられていたのだろう。アメリカ人の「マナーの<sup>フ リー ダ ム</sup> ぞんざいさ」と「意見の自由<sup>フ リー ダ ム</sup>の欠如」とは、アメリカにおいて自由と平等とが示した過渡期の歪みだったのかもしれない。そして、ディケンズは何よりも人間や社会の歪みに敏感だった作家であり、ディケンズにとってアメリカが憧れの地であっただけにその歪みがいっそう目に付いたのだろう。ディケンズが歪みとを感じる視点を検討する必要は勿論あるが、自由と平等という理念は、なにもいいことばかりではなく、様々な問題点も現実面にもたらすことを、ディケンズはわれわれに示してくれているのかもしれない。

## 註

- <sup>1</sup> G. K. Chesterton, “Appreciations and Criticisms of the Works of Charles Dickens”, *The Collected Works of G. K. Chesterton*, vol. XV (San Francisco: Ignatius Press, 1989), p. 291.
- <sup>2</sup> A・トクヴィル『アメリカの民主政治』下、井伊玄太郎訳（講談社学術文庫、一九八七年）、一一三頁。
- <sup>3</sup> John Forster, *The Life of Charles Dickens*, vol. 1 (London: Everyman’s Library, 2 vols., 1969), pp. 197-8.
- <sup>4</sup> Charles Dickens, *American Notes and Pictures from Italy* (Oxford: Oxford University Press, 1966), p. 252.
- <sup>5</sup> Chesterton, *op. cit.*, pp. 291-2.
- <sup>6</sup> Peter Gay, *The Enlightenment: An Interpretation, volume 2, The Science of Freedom* (New York and London: W. W. Norton & Company, 1977), p. 555. 訳文は以下のものを使わせてもらった。ピーター・ゲイ『自由の科学』、中川久定ほか訳（ミネルヴァ書房、一九八六年）、四五五頁。ピーター・ゲイは、英語の「フィロソファー」がフランス語の「フィロゾフ」に正確に対応していないとして、「フィロゾフ」をあえて使っている。
- <sup>7</sup> Cf. Jerome Meckier, “Dickens discovers America, Dickens discovers Dickens: The first visit reconsidered”, *The Modern Language Review*, vol. 79 (1984), p. 266.
- <sup>8</sup> Michael Slater, “Introduction”, *Dickens on America & the Americans*, Edited by Michael Slater (Brighton: The Harvester Press, 1979), p. 9.
- <sup>9</sup> Forster, *op. cit.*, p. 194.
- <sup>10</sup> トクヴィル、前掲書、三九八―三九九頁。
- <sup>11</sup> Slater, *op. cit.*, p. 91.
- <sup>12</sup> Edgar Johnson, *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*, vol. 1 (New York: Simon and Schuster, 2 vols., 1952), p. 443.
- <sup>13</sup> Dickens, *op. cit.*, p. 244.
- <sup>14</sup> Peter Conrad, *Imagining America* (New York: Oxford University Press, 1980), p. 30. フランシス・トロロプは、小説家としてはこちらの方が有名なアンソニー・トロロプの母親であり、アメリカでの生活の体験を綴った本を書いている。
- <sup>15</sup> *Ibid.*, p. 30.
- <sup>16</sup> Dickens, *op. cit.*, p. 122.
- <sup>17</sup> マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳（岩波文庫、一九八九年）、二七五―二七六頁。脱帽の拒否についてはクエイカー派に限っていつているが、アメリカ人に見られる「慇懃<sup>いんぎん</sup>な態度に欠けること」の理由をヴェーバーが「反権威的原理」に結び付けていることは明らかである。

<sup>18</sup> トクヴィル、前掲書、三〇九頁。

<sup>19</sup> Slater, *op. cit.*, p. 3.

<sup>20</sup> Meckier, *op. cit.*, p. 268.

<sup>21</sup> Slater, *op. cit.*, p. 67.

<sup>22</sup> Forster, *op. cit.*, p. 194.

<sup>23</sup> トクヴィル『アメリカの民主政治』中、井伊玄太郎訳（講談社学術文庫、一九八七年）、一七九頁。

<sup>24</sup> チェスタトン『棒大なる針小』別宮貞徳・安西徹雄訳、G・K・チェスタトン著作集4（春秋社、一九七五年）、六二頁。

<sup>25</sup> トクヴィル『アメリカの民主政治』中、一八六 七頁。

<sup>26</sup> Chesterton, *op. cit.*, p. 295.

---

\* 関口 功教授退任記念論文集編集委員会編『アメリカ黒人文学とその周辺』（南雲堂フエニックス、一九九七年）、三七九 - 九四頁。